

万葉集

[vol.63]

はじめての



人はよし 惠ひ止むとも

倭大后

卷二（一四九番歌）

訳 他人は故人をしのぶこともやがてなくなるかもしれない。たとえそぞうであつても、私には美しい鬘のように面影に見え続けて、忘れられないことだ。

人はよし 思ひ止むとも



この歌は天智十（六七一）年に天智天皇が亡くなった際、皇后であった

倭姫王^{やまとひめのおおまこ}が詠んだ挽歌です。同じ頃に詠まれた後宮のほかの女性たちによるとみられる歌も含め、「万葉集」には天智挽歌群が掲載されています。

『日本書紀』卷第二十七によれば、天智十年の九月に天智天皇が病気になり、十月十七日に重症化、十二月三日に近江宮で崩じた、とあります。直後の十二月十一日には、新宮で殯^{もがり}をしたこと、古代において社会的事件の前兆と考えられていた童謡^{わざうた}が三首みられたことも記されています。この年には、「漢書」で王室交代の前兆とされた鼎^{かなんえ}が鳴るなどの現象もあつたということで、いずれも、翌年に起ころる「壬申の乱」を予感させる内容であるといえます。

続く『日本書紀』卷第二十八でも、卷二十七の最後部を繰り返すように天智天皇が病に倒れた後の動向を記し、大海人皇子（後の天武天皇）は皇位に就く意思がなく出家した

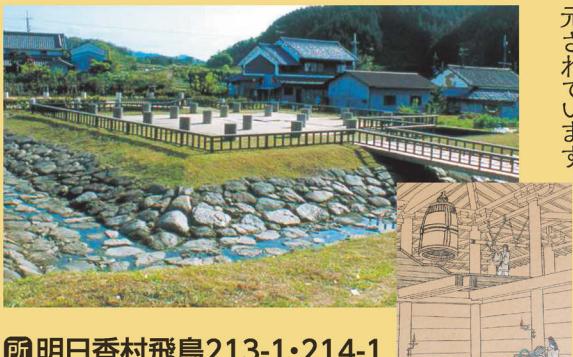
など、壬申の乱に至る経緯や乱の具体的な様子が事細かに記されています。

この歌を詠んだ倭姫王の父・古人^{おとえのみこ}大兄皇子^{おとえのみこ}は、舒明天皇の第一皇子で

したが、母親が蘇我馬子の娘・法堤^{ほばての}郎女^{いらめ}であったことから、六四五五年の乙巳の変で蘇我氏の本宗家が滅びると同時に、有力な後ろ盾を失つたとみられます。皇位に就くこともなく、出家して隠棲しようとしたものの、中大兄皇子（後の天智天皇）に謀反の罪で誅されたといいます。倭姫王の母親は不明であり、倭姫王と天智天皇との間に子どもが生まれたという記録もありません。

父親のかたきにあたる男性の妻としては夫の面影を慕うと歌を詠む、古代の女性の複雑な人間関係と心情とを思わずにはいられません。

（本文 万葉文化館 井上さやか）



所 明日香村飛鳥213-1・214-1
閻 明日香村文化財課
☎ 0744-54-5600

閻県広報広聴課 ☎ 0742-27-8326 FAX 0742-22-6904

つぶやき

万葉ちゃんの

和歌に関連するものを紹介するよ！



万葉ちゃん